

「政治性のない日本」への信頼

一九九四年九月中旬、米軍によるハイチ侵攻が騒がれたこと、ある新聞の片隅に小さな記事が掲載されていたのに注意を払う者は少なかったろう。

『パキスタン、フランスから十億円で潜水艦購入を決定』

十億円という額が、パキスタンにとっていかに莫大なものであるか、多少とも現地の人々の暮らしを理解する者なら容易に理解できるだろう。確かにパキスタンは、東西をインド・イランという西南アジアの超大国にはさまれ、厳しい国際情勢に置かれている。アフガン問題がソ連の消滅によって脅威でなくなった今でも、ヒンズー教原理主義の台東、カシミール問題をめぐってインドは依然としてあからさまな脅威である。とはいえ、印パ両国はそれぞれ独立以来、二度の戦争を含めて対立してきた。ニュース性から言えば、さして特別なできごとではなかったのかも知れない。

しかし、この小さな記事から憤りにも似た感想を覚えたのは、いくつかの理由がある。この果てしない軍拡競争がなぜ続くのかという素朴な疑問、「国際救援活動」で華々しく喝采を受けながら、誰にでも武器を売る国・フランスへの疑問。その過大な軍備負担のしわ寄せがどこに来るかという疑問、それらの国を範として「国際化」たけなわの日本への疑問、そして、そこまでの矛盾を強要する「近代的国民国家」そのものへの懐疑である。

こういう思いは、私が「アフガニスタン」にかかわり始めて以来である。一九八〇年代前半、西側諸国の「救援活動」は確かに目を見張るものがあつた。豊富な物量と人材、対応の迅速さ、あるものはヒーローとして登場し、体を張って活動する様は、医療人の羨望の的でもあつた。彼等の人道的気概を疑うものではない。

だが、私は現地に長く居て事を知り過ぎた。その後の顛末に対する幻滅を、現地と共有せ



ざるを得なかったからである。或る団体はアフガニスタン国内で不興をかって追放され、財源の一部を米国中央情報局(CIA)に依拠していたことをその報告書で知った。何よりも現地の伝統文化を見下げ、「援助屋」として優越感をちらつかせる心ない人達の存在、世界の耳目が去れば風のように消えうせる逃げ足の速さには、ただただ感嘆するばかりである。彼らの活動に政治や経済の利害がないとは言わせぬ。まさに、この種の「救援活動」によってもたらされる情報が、タイミングよく売り渡させる莫大な武器と無縁であるとは言えないのである。

こう思うのは、私が「アフガニスタン」にかかり始めて以来である。一九八〇年代前半、西側諸国の「救援活動」は確かに目を見張るものがあつた。豊富な物量と人材、対応の迅速さ、あるものはヒーローとして登場し、体を張って活動する様は、医療人の羨望的でもあつた。彼等の人道的気概を疑うものではない。

だが、私は現地に長く居て事を知り過ぎた。その後の顛末に対する幻滅を、現地と共有せざるを得なかったからである。或る団体はアフガニスタン国内で不興をかって追放され、財源の一部を米国中央情報局(CIA)に依拠していたことをその報告書で知った。何よりも現地の伝統文化を見下げ、「援助屋」として優越感をちらつかせる心ない人達の存在、世界の耳目が去れば風のように消えうせる逃げ足の速さには、ただただ感嘆するばかりである。彼らの活動に政治や経済の利害がないとは言わせぬ。まさに、この種の「救援活動」によってもたらされる情報が、タイミングよく売り渡させる莫大な武器と無縁であるとは言えないのである。

日本国民も政府も、だまされてはいけない。多少救援競争に後れをとったからといって、劣等感を持つ理由は何もないのである。少なくとも、武器輸出を禁じ政治的かわわりを意図的に避けてきた「日本の消極性」を誇るべきである。私の知る限り、現地で「政治性のない日本」への絶大な信頼を獲得してきたこの事実を誰が知ろう。欧米から愚弄された



日本の消極性は、現地では称賛と好意の対象であった。親日感情に陰りが見えてきたのは、実に日本で「国際化」が叫ばれ始めた時期と一致する。

日本人の称賛してやまぬ「欧米の人道的国際活動」、「デモクラシー」の表裏が、湾岸戦争であり、最近のハイチ侵攻である。湾岸戦争のとき、百二十億ドルの搬出をさせられたうえ、「金だけですますのか」と卑怯者よばわりされた苦衷を思い起せばよい。(あのとき危険の中を平和目的の輸送に従事していた日本人もいた)

日本は情報の遅れに煮え湯を飲まされたが、決して情報戦に負けたのではない。情報戦なるものは、所詮、宣伝上手の化し合いで、虚構が事実を制することである。こんなものはいずれ破綻する。問題の本質は、戦争加担への断固たる拒否を、真の平和主義に依って表明しなかったことにある。(それは、現実的に可能であった。)日本は、欧米に屈せざるを得ない自己の体質に敗北したのである。

あげくが、圧倒的イスラム民衆の対日感情悪化という代償であった。私たちが遠いアフガニスタンの山の中から、これまた遠い中米の小鳥の問題に無関心でおれないのは、このためである。アフガニスタンでは、先進国の「力による民主化」が、山村のすみずみまで取り返しのつかぬ破壊と殺戮をもたらしたのである。

近衛文麿が「英米本位の平和主義を排す」を発表したのは、第一次世界大戦の硝煙さめやらぬ一九一八年であった。その結果はともかく、それは新興中国の孫文の感動さえ誘った。だが、それから二十数年後の一九四五年、それは惨憺たる破局を以て潰えた。いま同様の論調が形を変え、「もたざる」発展途上国に説得力もつといが来るだろう。戦後五十年の現在、「国際議論」へ露骨に鞍替えした「もてる」日本は、それに誠実な総括を用意しているだろうか。

折しも、日本の国連常任理事国入りとルワンダへのPKO派遣が、大々的に報道されていた。

